



E-ASIA
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

初恋

矢崎嵯峨の舎

初出：「都の花」

1889（明治22）年1月

初恋

矢崎嵯峨の舎

ああ思い出せばもう五十年の昔となつた。見なさる通り今こそ ^{かしら} 頭に ^{ただ} 雪を ^き 戴き、
額にこのような波を寄せ、 ^{かお} 貌の ^{つや} 光沢も失せ、肉も落ち、力も抜け、声もしわがれた梅
^{おやじ} 干老翁であるが、これでも一度は若い時があつたので、人生行路の ^{ふみはじ} 踏始め若盛り
の時分にはいろいろ面白いこともあつたので、その中で初めて慕わしいと思う人の出来
たのは、そうさ、ちょうど十四の春であつたが、あれが多分初恋とでもいうのであろう
か、まアそのことを話すとしよう。

ちょうど時は四月の半ば、ある夜母が自分と姉に向つて言うには、 ^{しみず} 今度清水の
^{おじさま} 叔父様がお雪さんを連れて ^{うち} 宅へ泊りにいらつしやるが、お雪さんは江戸育ちで、こ
こらあたりの ^{いなかも} 田舎者とは違い、 ^{たちい} 起居もしとやかで、 ^{あいさつ} 挨拶も ^{おちつ} 沈着いた様子の
よい子だから、そなたたちも無作法なことをして ^{ふつつかも} 不束者、田舎者と笑われぬよう
によく気をつけるがよいと言われた。それからまたそのお雪という娘がどんなに心立て
がやさしく、 ^{みやび} 気立てがすなおで、 ^{みめかたち} どんなに姿が風流で ^ほ 眉目容が美しかろうと賞め
ちぎつて話された。幼少のうちは何事も物珍らしく思われるが、ことに草深い田舎に住
んでいると、見る物も聞く物も少ないゆえちよつとしたことも大層面白く思われるもの
で、母があのように賞めちぎる娘、たおやかな江戸の人、その人と話をする時には言葉

使いに気をつけねばならぬという、その大した江戸の人はまアどんな人なのであろう

か？ 早く^あ遇いたいもの、見たいもの、定めし面白い話もあろう、と自分の小さな胸の中にまず物珍らしい心が起ツて、毎日このことをのみ姉と言いかわして、珍客の来る日を待ツていた。そのうちにいよいよ前の日となると数ならぬ下女はしたまでが、「江戸のお客さま、お客さま」と何となく浮き立ツていた、まして祖母や姉なぞは、まして自分は一日を千秋と思ツていた。

当日は自分は手習いが済むと八ツ半から^{やり けいこ い}鎗の稽古に往ツたが、妙なもので、気も魂も弓には入らずただ心の中で、「もう来たろうか？」と繰り返していた。稽古が済む

^{だつと}と、脱^{だつと}兎何のそのという勢いでいきなり稽古場を飛び出したが、途中で父の組下から^{すやま}烏山勘左衛門に出遇ツた。

勘左衛門は至ツてひょうきんな男ゆえ、自分にはなはだ好きであツて、いつも途中な^{みちづれ}どで出遇う時にはいい同行者だと喜んで、冗談を言いながら一しよに歩くのが常であツた。今日も勘左衛門は自分を見るといつもの伝で、「お坊様今お帰りですか？」とにっこりしたが、自分は「うむ」と言ツたばかり、ふり向きもせず突ツこくるように通り抜けたが、勘左衛門はびつくりして口を開いて、自分の^あ背^{うしろ}を見送ツていたかと思う

と、今でもその^{かお}貌が見えるようで。

自分は中の口から奥へはいツてあたりの様子に気をつけて見たが客来の様子はまだなかつた、さてはまだなのかと稽古着のままで姉の^{へや}室へ往ツて、どうしたのだろうと^{うわさ}噂をしていた。しばらくするとばたばたばたという足音がして部屋の外から下女の声で、

「お嬢さま、お嬢さま！ お客さまが、江戸の」

自分はいきなり飛び出そうとした、「静かに！」姉に言われてそうだと、静かに玄関の方へ往つてそしてお雪という娘を見た。

この時娘は、叔父の^{あと}後^{とも}に続いて^{とも}伴の女中をつれてしとやかに玄関を上つて来た娘は、なるほど、母の賞めた通り誠に美しい娘だ、^{せい}背はすらりと高く、色はくつきりと白く、目はぱつちりと^{すず}清しく、ほんとうの美人だ。^{まゆずみ}黛を施し、紅粉を用い、盛んに^{よそお}粧いを凝らして後、始めて美人と見られるのはそれはほんとうの美人ではない、

飾らず装わず天真のままで、それで美しいのが真の美人だ。この時の娘の^{みなり}身装は旅姿のままで、^{さつぱり}清楚とした^{なり}装で飾りけの気もなかつたが、天然の麗質はあたりを払つ

て自然と人を照すばかりであつた。それにどんなに^{かおかたち}容貌が美しくても、氣象が無下に卑しい時は、どうも^{ふうさい}風采のないものであるが、娘は見るからがその風采の中に温良貞淑の風を存して、どことなく気高く、いかなる高貴の姫君というとも恥かしからぬ風であつた。

それに田舎者はどれほど容貌が美しくても、どれほど身装が立派であつても、かの一種言いがたき意気というか、しなやかというか、風流というか？ かの一種たおやかな風を欠くものであるが、娘はその風をも備えていた。清水の叔父は自分の父の弟で、祖母には第二番目の子だ、それゆえ娘は自分と同じように祖母の孫で、しかも最愛の孫であつたそうな。その夜一同客座敷へ集まつて^{よもやま}四方山の話^{しんみ}を始めたが、いずれも肉身の寄合いであるから誰に遠慮ということもなくその話と言つては藩中のありさま、江戸の話、親類知己の身の上話、またはてんでんの^{こども}小児の噂などで、さのみ面白い話でもないが、しかしその中には^{しんみ}肉身の情と^{ちすじ}骨肉の愛とが現われていて、^{たんそく}歎息するこ

ともあれば、口を開いて大笑いをすることもあつて近ごろ珍しい楽しみであつた。祖

母はお雪やここへというような風に、目つきで娘を^{そば}傍へ招いて、いろいろなことを尋

ねたり語つたりしていたが、その声の中には^{いとおしかあい}最愛可愛という意味の声絶えず響

いていたように思われた、そして祖母は娘が^{ちい}少さかつた時のように今もなお抱いたり、

^な撫でたり、さすつたりしたいという風で、始終娘の^{かお}貌をにこにこことさも楽しそうに見

ていたが、娘も今は十八の立派な娘ゆえ、さすがにそうもなりかねたか、ただ肩に手を掛

けて、「ほんに立派な娘におなりだの」と言つたのみであつた。自分は祖母が自分を愛する

ようにこの娘を愛している様子、と自分が祖母を慕うように娘が祖母を慕つてい

る様子、とを見て何となく^{こころうれ}心嬉しく思つた。

その翌日のことで自分は手習いから帰るや否や、「娘はどうしたかな？」と見ると姉

の室で召し^つ伴れて来た女中と姉と三人で何やら本を見ていたが、自分を見てにつこりし

たので自分もその笑い貌に誘い出されて何ゆえともなくにつこりした。自分はこれから

剣術の稽古があるから、すぐに稽古着を着て、稽古^{ばかま}袴をはいて、竹刀^{しない}の先へ

^{めんこて}面小手を^{はさ}挟んで、肩に担いで部屋を出たが、心で思つた、この勇ましい姿、

^{かつばつ}活澁といおうか雄壮といおうか、その活澁な雄壮な風と自分が稽古に精を出すのと

を娘に見せてやろうと思つた、それから武者修行に出る^{むさし}宮本無三四のことを思い出しな

がら、姉の部屋へはいつたが、この小さな無三四は^{こうかつ}狡猾にも姉に向つて、何食わぬ

貌で、「叔父さんは？」と^{たず}問ねた、姉は何か^{こた}対えていたが自分はそんなことは聞きもせず、見ぬふりで娘の方をちらりと見て、それなり室を出てしまうと後から笑い声

が聞えた。自分の噂だと嬉しく思ツたが、今さら考えると、なんのそうでもなかつたのであろう、晩方から親類、縁者、叔父の^{ほうゆう}朋友、大勢集まツて来たが、中には女客もあツたゆえ母を始め娘も、姉も自分もその席に連なツた。そのうちに^{しよくだい}燭台の花を飾ツて酒宴が始まると、客の求めで娘は^{つくしごと}筑紫琴を調べたがどうして、なかなか糸竹の道にもすぐれたもので、その^{つまおと}爪音の面白さ、自分は無論よくは分らなかつたが、調べが済むと並みいる人たちが口を極めて賞めそやした。娘は賞められて恥かしがり、この席に連なツているのをむしろ^{つら}憂いことと思ツているらしく、話もせず、人から物を言いかけられると、言葉少なに答えをするばかり、始終下を向いていた、がその風はいかにも^{みじん}柔和でしとやかで、^{かど}微塵非難をする^{かど}廉もなく、何となく奥ゆかしいので、自分は余念もなくその風に見とれていた。

自分の父は武辺にも賢くまた至ツて厳格な人で、夏冬ともに朝はお城の六ツの鐘がボーンと一ツ響くと、その二ツ目を聞かぬ間にもウ起き上ツて朝飯までは、兵書に^{まなこ}眼をさらすという人であツた、それゆえ自分にも^{あさね}晏起はさせず、常に武芸を励むようにと教訓された。

自分はありがたいことには父のお蔭で^{そうけん}弓馬鎗劍はもちろん、武士の表道具という芸道は何一ツ稽古に往かぬものはなかつたが、その中で自分の最も好いたものという^{りゆうよう}と弓で、百歩を隔てて、^{ようゆうき}柳葉を射たという^{おおいでん}養由基、また^{おおいでん}大炊殿の夜合戦に兄の^{かぶと}兜の星を射削ツて、敵軍の^{きも}胆を冷やさせたという^{ちんぜい}鎮西八郎の^{ぎりよう}技倆、その技倆に達しようと、自分は毎日朝飯までは裏庭へ出て^{まきわら}捲藁を射て励んでいた。

今日も今日とて裏庭へ出て、目指す的と捲藁を^{ねら}狙ッて矢数幾十本かを試したので、
少し疲れを覚えて来たゆえ、しばし一息を入れていると冷や冷やとして^{こころもち}心地よい
朝風が汗ばんで来た貌や、体や、力の張ッて来た右の^{かいな}腕へひやりひやりと当るのが
実に心持のよいことであツた。誰でも飢えた時^{かわ}渴いた時には食物や水がうまいもので
あろうが、その時の朝風は実にその食物や水よりもはるかに心持よく、自分は気が
^{せいせい}清々として来た。自分は^{ゆんづえ}弓杖を突いて……というのも^{すさ}凄まじいがいわゆる弓
杖を突いて、あたりに敵もいないのに、立木を敵と見廻してきつとして威張ッていた。
突然二ツの影法師が自分の頭上を越えて目の前に現われた、自分はふり返ッて娘と姉と
を見た。

娘は足を止めて、感心に御精が出ますこと、と賞めそうな風でにつこりして^{すず}清しい
目を自分に注いでいた、自分は目礼をして、弓を投げ棄てて姉の傍へ往ッた。
「大層御精が出ますことねエ」はたして娘が賞めた。

「どうしてあなた。^{しか}叱られてばかりいます、精を出しませんから」

娘がせつかく賞めたものを、姉がよけいな口をさし入れた、自分は不平に思ッた、し
かし姉はさすがに姉で、情のあツたもので、弟の賞められたのが嬉しかツたと見えて、
につこりして、「それでもあなた、出来ないくせに大変に好きで」というのを^{まくら}枕に

置いて自分を賞め始めた、前の言葉とは矛盾したが、そこが女の癖で、^{とんじやく}頓着はな

かツた。自分が^{いくつ}幾歳の時四書をあげて、幾歳の時五経をあげて、馬をよく乗ッて、劍
術が好きで、鎗がどうで、弓がこうでと、姉が自分のことを賞めたてるのを、娘は笑い
ながら自分の方を見つめて、その話を聴いていたが、聴き終ッてから、

「ほんとうに感心ですねエ、お少^{ちい}さいのに」

この一言は心から出たので、自分は賞められて嬉しく思ツた、的の黒星を射抜いて、えらいと人に賞められたよりは、この人に賞められたのを嬉しいと思ツた。

「庭の方へ往ツて見ましょう。秀さんもおいで」

姉と娘との間に立ツて、自分は外庭の方へ廻ツて往ツたが、見つめた、向うの垣根^{かきね}の下に露を含んで、さも美しく、旭光^{あさひ}に映じて咲いていた卵^うの花を見つけた。

「お姉さま、お姉さま、江戸のお姉さま！ 御覧なさい。この花はね私が植えたのですぜ、植えたてには枯れかかつたけれど、ヤツと骨折ツて育てたのです。奇麗でしょう？」

「おやまア奇麗！ 花もお好きなの？ 武芸もお好き？」と言ツて白い手を軽く自分の肩へ掛けて、ちよつと揺すツてそして頭を撫でたが、不思議にも、その手が^{さわ}触ると自分の胸はさわぎ出した、がそれを見られまいと急いで、

「花は白い方が奇麗ですねエ、赤ツぼいのよりか」

「そうですね、淡白^{あツさり}していて。赤いのはなぜおきらい？」

「なぜツて？ 赤いなア平家の旗色で、白いなア源氏ですもの、源氏の方が強いから、だから……」

愚にも附かぬことを言いながら、内庭と外庭の間の枝折戸^{しおりど}の辺まで近づいた。と見ると花壇に五六本の白牡丹^{はくぼたん}が今を盛りと咲いていた、その花の下に飼猫の「コロ」

が朝日を一杯背中に受けて、つくねんとうずくまツていた「日向^{ひなた}ぼこりをしているの

か、居睡りをしているのか？ 「牡丹花下の睡猫^{すいみょう}は心舞蝶^{ぶちょう}にあり」という油断

のならぬ猫の空睡^{そらね}、ここへ花の露を慕ツて翩々^{へんぺん}と蝶が飛んで来たが、やがて

はがい

翼を花に休めて、露に心を奪われて余念もない様子であつた。油断を見すました大敵、しかし憎げのないひょうきん者め、前足を縮めて身構えをしたが、そら、飛びかかつた、蝶は飛び退いたが、あわてて、まごついじびた、地下をひらひらと飛び廻わつていた、が、あわや「コロ」の爪にかかりそうになつた。

「あらまア！ あんないたずらを」と娘は走せよつて、

「およし可哀そうに」

娘はしなやかに身をかが屈めて、「コロ」を押えながら蝶を逃がした。それから「コロ」を抱きあげてそしてやさしい手でくるくると「コロ」のかしら頭を撫でまわした、「コロ」は叱られたと思つたか、目を閉じ、身を縮め、首をすぼめて小さくなつたその風の可愛らしさ、娘はその身のかお貌を「コロ」の貌から二三寸離して、しけしけと見ていたが、そのすすしい目の中にはどんなに優しい情がこも籠つていたろう。「もう虫なんかを捕るのではないよ」と言つて、その美しい薔薇色の頬を猫の額へ押し当て、真珠のような美しい歯を現わしてゆつたりと微笑つたが、そのにつこりした風はどんなにあどけなく、どんなに可愛らしい風であつたろう！ 自分は猫をうらや羨ましく思つて余念なく見とれていた。娘は頬の辺にまだわらい微笑のほのめいている貌をちよいとふり上げて自分の貌を見たが、その笑い貌の中には、「なぜそんなに人の貌を見て」と尋ねるような風があつたので、あるいはなかつたかも知れぬが、自分にあつたように思つたので、はつと貌を赤らめて、あわてて裏庭へ逃げ出してしまつた、が恥かしいような、嬉しいような、かんじ妙な感情が心に起つて何となく胸が騒がれた。

その日の七ツ下りに自分は馬の稽古から帰ッて来て、またいつものように娘のいる座敷へ往ッて見ようと思ッたが、はてまア不思議！ 恥かしいような怖いような気がして、往きたくもあるが往きたくもなく、どうしたものかと迷い出して、男らしくないと

かんしゃく

癩癩を起して、そこで往くまいと決心して誓いまで立てたが、さて人情は妙なもので、とんと誰か来て引ッ張るようで、自然と自分の体が動き出して、知らぬ間に娘の

いる座敷の前まで来た。^{からかみ}唐紙は開いていた、自分は座敷の方を向きもしなかつたが、それでいて、もう娘が自分を見たなと知ッていたので、わざと用ありそうに早足で前を通り過ぎ、そのくせ隣座敷の縁側で立ち止まッて、柱へつかまッて庭を見ていた。すると娘のいる座敷で誰か立ち上るような音がしたが、すぐその音が近づいて来た、自分の胸はときめいた、注意はもうその音一ツに集まッてしまッて心は目の前にその人の

かたち

像を描いていた、その人の像はありありと目の前に見えるのに、その人は自分の

うしろ

背へ立ッて、いたずらな、自分の^{ちりげ}頸毛を引ッ張ッて、

「秀さん、いい物をあげるからいらッしゃい」

「いい物？」いい物とは嬉しい、と思ひながら、嬉しさにほとんど夢中となり、後に続いて座敷へはいると紙へくるんだ物をくれた、開けて見るとあたり前の菓子が嬉しい人

から^{もら}貰ッた物、馬鹿なことさ、何となく尊く思われた、^{こわ}破さないように、丁寧に、

そつと撫でるように紙へくるんで^{たもと}袂へしまうのを、娘はじつと見ていたがにッこりして、

「秀さんいい物を^{こし}拵らえて上げましょう」

「どうぞ」

娘は幾枚となく半紙をとり出して、

「そらようございますか、これが何になるとお思いなさる、これがね」ゆツたりした調子で話し始めた。「——これは、そらね、これをこう折ッて、ここをこうすると、そう

ら、一つの鶴^{つる}が出来ますよ、そら今出来ますよ、そら出来た」

娘は鶴を折るとそれから舟、香箱、菊^{きく}皿^{ざら}、三^{さん}方^{ぼう}などを折ッてくれた。自分は

娘が下を向いて折物に気を取られている間、その雪のような白^{えり}い^{つやつや}頸^{えり}、その艶々とした緑の黒髪、その細い、愛らしい、奇麗な指、その美しい花のような姿に見とれて、

その袖のうつり香^うに撲たれて、何もかも忘れてしまい、ただもウウツとりとして、嬉し

さの余り手を叩^{たた}きたいほどであつた。

「お姉さま、折方を教えて下さいな」

それから自分は折方を習ッて、二三度試して見たが出来なかつたので、娘は「ほんとうにこの子は不器用な人だ」と笑いながら、いやというほど自分の手を打ッた、痛かッ

た、痛さが手の筋へ染^しみ渡ッた、が痛さと一しよに嬉しさも身に染み渡ッた、嬉しいから痛いのか、痛いから嬉しいのか？ 恐らく痛いから嬉しいので……まアどうでもいいとして、痛さが消えぬように打たれたところをそつと撫でた。

ここへ姉がはいッて来て、

「秀さん何をしておいでだ」

娘はにっこりして姉に向い、

「どうもこの子は不器用でいけません」

「こんなものは出来なくッてもいいや」

「出来なくッてよければ、なぜ教えてくれと言いました？ わがままッ子め！」

娘は口元で笑いながら額越^{にら}しに睨^{にら}む真似をした、自分はわがまま子と言われるのよりは、何とかほかの名を付けてもらいたかつた。

その夜のことで、まだ暮れてから間もないころ自分は何の気もなしに、祖母の室へ遊びに往ッた、すると祖母を始めとして両親もおれば叔父も娘もいて何か話していたが、

自分を見ると父が眉に皺^{しわ}を寄せて、「あちらへ往ッておいで。子供の聞くような話ではない」ときつとして言ッた、が自分はこの場の様子を怪しんで、物珍らしい心から出るのを少し躊躇^{ちゆうちよ}躊躇^{すず}していると、娘が貌をふり上げて清^{すず}しい目で自分を見た、その目の中には、「早く出て往ッて……」というような風があツた。ちよつと見た娘の一目は儼然^{げんぜん}として言われた父の厳命より剛勢だ、自分は娘の意に従いすぐに室を出たが、それでも今室へはいッた時ちらりと皆^{みんな}の風が目^めに止ッた。父は叔父に向ッて、「さようさ、若年にしてはなかなか感心な人で」などと話していた、また娘は下を向いてひざ^{ひざ}膝^{ひざ}を撫でていると、祖母と母とが左右からその貌を覗^{のぞ}き込んで、何をか小声でたずねていた。自分は室を出てから、何を皆は話しているのか、なぜまた自分がいてはわるいのか？と思ッたが、なアに、思い込んだのではない、ほんの目の前を横ぎる煙草のけぶり^{けぶり}、瞬^{めばた}きを一ツしたらすぐ消えてしまッた。

元来この日は、自分は何となく嬉しくいそいそとしていた、しかし何ゆえ嬉しかツたのかその理は知らなかつた、が何がなしに嬉しかツたので臥床^{ふしど}へはいッてからも何となく眠^ねるのが厭^{いや}で、何となく待たるるものがあるような気がするので、そのくせその待たるるものはと質^{ただ}されるとなに、何もないので、何もないと知ッているが、そこが妙なわけで、夢^{ゆめ}現^{うつ}の間でたしかあるように思ッているので、どうも臥^ねるのが厭であツた、それゆえ床の上に坐ッていると、そら、娘の姿がちらちら目の前に現われて来た。につこりと笑いながら自分の手を打ッた時の貌、その目元、口元で笑いながら額越^ぬしに睨^{にら}んだ貌、そのりきんだ目つき、まア何よりもその美しい姿^{すがた}容^{かたち}が目の前にちらちらし始めた。自分は思い出し笑いをしながら、息も静かにして、その姿が逃げて

往かぬようと、荒く身動きもせず、そろそろ夜具の中へもぐり込んで、昼間打たれた手のところをそつと頬の下へ当てがツて、そのまま横になツたが、いつ眠ツたかそれも知
こころもち ねい
らず 心 地 よく眠入ツてしまツた。

自分はこの時からというものは娘の貌を見ている間、その声を聞いている間、誠に嬉しくまた楽しく、ついうからうからと夢の間に時を過していた。こうはいうものの娘がいなくて、夢いささかふさぐなぞということはなかつた。何を言ツても自分はまだ十四の少年、自分と娘とは年がどれほど違ツていて、娘は自分より幾歳いくつの姉で、自分は娘の前では小児であるということ、また娘はただ一時のとうりゆうきやく逗留客で日ならずこの土地を去る人ということ、自分は娘を愛しているのか、はたまた娘は自分を愛していないのかということ、すべてこれらのことは露ほども考えず、ただ現在の喜びに気を取られて、それを楽しいことに思ツていた、がその喜びは煙のごとく、霧のごとく、
かすみ
霞のごとくに思われたので、どうかすると悲しくなツて来て、時々泣き出したこともあツたが、なに、それだとして暫時ざんじの間で、すぐまた飛んだり躍ねたりして、夜も相
ねぶ
変らずよく眠ツた。

叔父はわずかに一週ひとめぐりの休暇を賜わツて来たので、一週りの時日はほんの夢の間
のようであツた。もう明日一日となツて、自分は娘にも別かれなければならぬかと、何
となく名残り惜しく思ツたが、幸い叔父が三日の追願おいねがいをしたので、なお二三日は
こちらに滞留していることとなツた。しかるにその夜のことで母と祖母との間に誠に嬉しい話が始マツた、それを何かというところで、もう二三日過ぎると叔父も江戸へ帰る
により、何か江戸土産みやげになりそうな、珍らしい面白い遊戯あそびを娘にさせて帰りたい、
が何がよかろうと二人が相談を始めた。しかし面白い遊びといツたところがこの草深い

田舎では、五節句、^{たなばた}七夕、天皇祭でなくば^{たけが}茸狩り^{わらびと}蕨採り、まアこんなもので、それを除いては別段これぞという遊びもない、けれども今は四月二十日、節句でもなければ祭でもない、遊戯と言ッては蕨採りのみだ、蕨採りと言ッたところがさのみ面白い遊戯でもない、^{すりばち}が摺鉢のような小天地で育ッている見聞きの狭い田舎の^{こども}小児には、それが大した遊戯なので、また江戸のような繁華な都に住んでいて野山を珍らしく思う人にはやはり面白い遊戯なので、それゆえいよいよ蕨採りに往くことと極まり、そのことを知らせた時には一同^{よろこび}歓喜の声を上げた。

さてその夜は明日を楽しみにおのおの^{ねどこ}臥床にはいつたが、夏の始めとて夜の短さ、間もなく東が白んで夜が明けた。

その日の四ツごろようように^{したく}仕度が出来て、城下を去ること^{はんみち}半里ばかりの長井戸の森をさして出かけた、同勢は母と、姉と、娘と、自分と、女中二人に^{しもべ}下部一人、都合七人であツたところへ、例の勘左衛門が来合わせて、私もお伴をと加わツたので、^{にぎ}合わせて八人となり、賑やかに成ッて出かけた。

やしき^{くるわ}家敷の？ 郭を出て城下の町を離れると、俗に^{せんげん}千間土堤という堤へ出たが、この堤は夏刀根川の水が^{あふ}溢れ出る時、それをくい止めて^{ばんけい}万頃の田圃の防ぎとなり、幾千軒の農家の命と頼む堤であるから、随分大きなものである、堤の上ばかりでも広いところはその幅十間からある、上から下へ下りるには一町余も歩かねば平地にはならぬ、まア随分大きな堤だ。堤の両側は^{ひら}平一面の草原で、その草の青々とした間からすみれ、^{たんぽぽ}蒲公英、^{れんげそう}蓮華草などの花が春風にほらほら首をふッていると、それを

面白がッてだか、蝶が ^{へんぺん} 翩翩と飛んでいる。右手はただもう田畑ばかり、こッちの方

には ^{ささげ} 小豆の葉の青い間から白い花が、ちらちら人を招いていると、あちらには麦畑の

^{そうかい} 蒼海が風に波立ッているところで、^{なるこ} 鳴子を馬鹿にした ^{むらすずめ} 群雀が ^{かかし} 案山子の

^{まわり} 周囲を飛び廻ッて、^{ほじ} 辛苦の粒々を掘っている、遠くには森がちらほら散ッて見える

が、その蔭から農家の屋根が静かに野良を ^{なが} 眺めている、^{へび} 蛇のようなる畑中の ^{こみち} 小径、

里人の往来、^{おぐるま} 小車のつづくの、^{ひえ} 田草を採る村の娘、^ま 稗を蒔く男、^{つり} 釣をする老翁、

犬を打つ ^{わらべ} 童、左に流れる刀根川の水、前に ^{そび} 聳える ^{つくばやま} 筑波山、北に盆石のごとく

見える妙義山、隣に重なッて見える ^{はるな} 榛名、日光、これらはすべて画中の景色だ。

^{いなか} 鄙の珍しい娘の目にはさすがにこの景色が面白いと見えて、たびたびああいい景色と賞めた。

途中では出遇ッた人もまれであッた。初め出遇ッたのが百姓で、重そうな荷をえッち

らおッちら背負ッていたが、^{ほおかむ} わざわざ 頬冠りを取ッて会釈して行き過ぎた。次に出

遇ッたのが村の娘で、土堤の桑の葉を摘みに来たのか、桑の葉の ^{つまッ} 充満した ^{めかご} 目籠をてん

^{こわき} でん小脇に抱えていたが、われわれを見るところこそ土堤の端の方へ寄ッて、立ち止

まッて、「あれはどこ様の嬢様だが、どこさアへ往かッせるか」などと噂をしていた。

その次に見かけたのが農家の小児で、土堤で余念なく何やら摘んでいたが、その中一人

が何か一言言ッたのを相図に、^{まつくらさんぼう} 真暗三宝 ^{いだ} 駆け出した、それから土堤の半腹ま

で行き、はるかにこちらをふり向いたが、上から勘左衛門が手招ぎをしたら、またわイ

わいと言ッて一目散に駆け下りてしまッた。

勘左衛門の来たのはわれわれの興を増す種であッた。この男が歩きながら始終こっけい滑稽を言ッていたので、途中は少しも退屈せず、いつの間にか境駅のこちらの渡し場まで来た。渡守^{せんだう}はわれわれの姿を見るといきなり小屋から飛び出して、二ツ三ツじぎ叩頭をしてそして舟を出した。

このところは川幅は六七町もあろうか、これから上になると十四五町もあろう、大刀根、小刀根、と分れるところでその幅最も広いところだ。娘は姉に向ッて言うには、「このごろ江戸で名の高い馬琴という作者の書いた八犬伝という本を読みましたが、その本に出る人で……」とかの犬飼犬塚の両犬士が芳流閣上より^{まろ}転び落ちて、ついきょうとく行徳へ流れついたことを話して、その犬士の流されたところもここらであろうか

などと話しているうち、船は向うの岸へ着いた。それから上陸して境駅の^{いりぎわ}入際から

すぐ横へ切れると、森の中の小径へかかッた、両側には^{すぎ ひのき なら}杉、檜、檜などの

^{たぐい}類が行列を作ッて生えているが、上から枝が^{かぶ}蓋さッていて下に^{こしたやみ}木下闇が出来ている、その小径へかかッた。

「もうじきそこからはいるのです。さア皆さん採りッこをしましょう」と勘左衛門が勇み立ッた、もつともわざと。

「秀さんようございますか」娘は笑いながら——「まけませんよ」

「ええ、ようございますとも。負けるもんか女なんぞに」

長井戸の森は何里ぐらい続いていたか、自分はよく覚えておらぬが、随分大きな森であッた、さて森の中の小径をおよそ二三町もはいッて往くと、^{はもり}葉守の神だか山の神だかえたいの分らぬ小さな神の^{ほこら}祠の前へ出た、これが森の入口なので。森の中へはい

ツて見ると、^{おぐさ}小草の二三寸延びた蔭または^{かやつりぐさ}蚊帳草の間などから、たおやめの書

いた^{かつこう}仮名文字ののしという^{わらび}恰好で、蕨が半身を現わしていた、われわれはこれ

を見ると、それそこにも！ おお大層に！ ほらここにも！ なんとまア！ などとし

きりに叫びながら^{こおど}小躍りをして採り始めた、始めのうちは皆一とこで採ツていたが、
たちまち四五間七八間と離れ離れになツて採り始めた、そして一本の蕨を二人が一度に見つけた時などは、騒ぎであツた、

「あれ私が見つけたのだワ！」

「あらまア！ お嬢様、おずるい。これは私が見つめました」

「お雪さま、清にお負けなさいますな」

そうかと思うとあちらの方では、「おやどこへ往ツたろう？」「こちら、こちら！」

などと手を叩いていた。また蕨に氣をとられて夢中でいると、突然^{あしもと}足^{きじ}下から雉子が

飛び出したのに驚かされたり、その驚かされたのが興となツて、一同^{えつぼ}笑壺に入ツたり
して時のうつつたのも知らず、いよいよ奥深くはいツて往ツた。不意に人声が聞え出し

た、どこから聞えるのだか？ 方々を見廻すと、はるか向うの木の間から^{けぶり}煙が細く、
とんと蛇のように立ち昇ツていた。

われわれは行くともなく、進むともなく、煙の立つ方へ近づいた、すると木の間から
三人の人影が見えた。二人の男は^{きやはん}紺の脚^{きりお}半に^{わらんじ}切緒の草鞋という嚴重な足ごし

らえて、^{しろえり}白襟^{はッび}花色地の法被を着ていた、向う向きの男は後からでよく分らなかつ

たが、^{ぶっさき}打割羽織を着ていて、しかもその下から大刀の^{さや}鞘と小刀の^{こじり}小尻とが見え

ていた様子といい、一壇高き切株へどツかと腰を打ち掛けて、屋台店の^{かに}蟹と^{ふみはだ}跋扈

かッていた ^{ていたらく} 為 体 といひ、いかさまこの中の ^{かしら} 頭 領 と見えた。

われわれの近づくのに気がついたか、^{くだん} 件 の男はこちらをふり向いた、見覚えの貌だ、よく見れば ^{やまぶぎよう} 山 奉行 の森という人で、^{あと} 残 の二人は ^{やまかたちゆうげん} 山 方 中 間 であつた。

山奉行というのは、年中腰弁当で山林へ出張して、山林一切のことを管督する役で、身柄のよい人の勤むる役ではない、それゆゑ自分などに対しても、自然丁寧なので。

森は自分を見ると、満面に ^え 笑み 傾けてそして立ち上つて、
「おや、秀さん。蕨採りですか？ 大層大勢で。採れますかな？ どちらもお見せなさい」

そのうちに一同も近づいて来た。森は ^{ふたあし} 二 歩 三歩前へ進み、母を始め姉や娘に向つて、^{いんぎん} 慇 懃 に挨拶をして、それから ^{ひらくも} 平 蜘蛛 のごとく ^{じぎ} 叩頭 をしている勘左衛門に向ひ、
「今日はお伴かな、御苦労だの」と言つて、それからまた下女の方へ向いた、が物は言わず、ただ挨拶に笑貌を見せて、すぐまた母の方へ向き、
「いかがでござりまする、ちと小屋へいらしつて御休息をなすつては。はいはいや誠にむさくるしいところで……が……渋茶でも献じましょう。こりや八助、何かを取り
^{そろ} 揃 えて持つて参れ、身共は小屋へ参るから。さ御案内致しましょう」

時刻は八つごろでもあつたか、この辺は一面の杉林で、^{こずえ} 梢 の枝は繁りに繁つて日の目を ^{かく} 蔽 すばかり、時々気まぐれな鳩が ^{ふく} 膨 れ声で啼いているが、その声が ^{こだま} 木 精 に響いて、と言うのも凄まじいが、あたりの樹木に響き渡る様子、とんと山奥へでも往つたようで、なんとなく物寂しい。林中の立木を柱に取つて、板屋根をさしかけたほつたて小屋、これは山方の人たちが ^{にわかあめ} 俄 雨 に出遇つた時、身をかくす ^{のが} 遁 れ 場所 で、正

面には暈が四五暈、ただしたたというもみのないほどの汚きたならしいやつ、それから前

が土間になつていて、真中に炉が切つてあろうという書割かきわり。

母と、森と、勘左衛門の三人が三鉄輪みつがなわに座を構えて、浮世雑談ぞうだんの序を開くと、

その向うでは類は友の中間同志ちゅうげんが一塊ひとかたまりとなつて話を始めた、そこで自分は少し離れて、女中連の中へはいり込み、こちらの一方へ陣取つた。

「秀さん」娘は笑いながら、「あなたどのくらい採りました、お見せなさい。おやたつたそれきり、少ないことねエ、私の方が多うございますよ、そちら御覧なさい、勝ちましたよ私の方が」

自分はこの時姉がその身の採つたのを娘のと一しょにしたところを見た。

「ああ、ずるいずるい、家の姉さんのを混ぜたのだもの」

「あら、あんなこと。ほほほほ混ぜはしませんよ」

「いいえ、混ぜました、混ぜましたよ、見ていましたからね」

「あら。まア、卑怯ひきょうな、男らしくもない、負けたものだからそんなことを」

そのうちに渋茶がはいると、かねて中間に持たせて来た鮓すしを今日の昼食として、な

よもやま
お四方山の話をしていた。

その時勘左衛門の話に、このひょうきん者が検見けんみの伴をして、村々を廻わつて、あ

る村で休んだ時、脚半の紐ひもを締め直すとして、馬鹿なことさ、縁台の足ぐるみその紐を結びつけて、そして知らずにすましきつて、茶を飲んでいたが、そのうち上役の者が、いざ、お立ちとなつたので、勘左衛門も急いで立ち上つて足を挙げると、いけない、挙

げる拍子に縁台が傾いたので、盆を転覆ひつくりかえして茶碗ちやわんを破こわしたが、いまだにそれが一ツ話でと、自身を物語つたのを、われわれ一同話を止めて、おかしな話と聞い

ていたが、実にこの男は滑稽家でもあつたが、またそそくさした男でもあつた。

さてしばらくここに休んでいたが、自分たちの組が大人を催促して、山奉行に別れて、再び蕨採りに出かけた。今度は出かけるや否や、すぐちりぢりになつて採り始めた。自分は娘の傍を離れず、娘が採るたびに自分の採つたのと比較して見て、負けまいと思つて励んでいたが、この時はもう蕨に気を採られて、娘のことは思つてはいなかつた、ト言つて忘れてもいなかつたので、娘の傍にいるということは、^{あん}闇に知つていたので、

いわゆる虫が知つていたので、——その^{ひるが}飄^{たもと}えるふりの^{けかえ}袂^{きぬ}、その蹴返す衣の

^{つま}褻、そのたおやかな姿、その美しい貌、そのやさしい声が、目に入り耳に聞えるので、

——その人の傍にいるとどこかかすかに感じていたので、それゆえ一層楽しかつた。不意に自分は向うの薄暗い木の下に非常に生えているところを見つけた。嬉しさの余り、

声を上げながら駆け寄つて、手ばしこく採ろうとすると、娘も^か走けて来て採ろうとするから、採つてはいけないと娘をささえて、自分一人で採ろうとした、がいけなかつた、

自分は今まで採り溜めたのを、風呂敷へ入れて^さ提げていたが、それを今すつかり忘れて、

その風呂敷を手離して、娘と手柄を争つたので、風呂敷の中から採つたのが^{こぼ}溢れて、

あたりに散るといふ大失敗、あわてて拾い集めるうちに、娘は笑いながら、一ツも残さず採つてしまつた。自分が見つけたのを横取りするのはひどい、返して下さい、と争つ

て見たが、娘は情^{こわ}強く笑つていて、返しそうな様子もないから、自分は^{くちお}口惜しくな

り、やつきとなり、目を皿のようにして、たくさんあるところを、と、見廻わした、運

よくまた見つけた、向うの^{むらかけ}叢蔭に、が運わるく娘も見つけた。や負けた、娘が先へ

走り寄つた。^{だしぬけ}唐突に娘があれエと叫んだ、自分は思わずびつくりした、見れば、も

う自分の傍にいた、真青になつて、胸を波立たせて、向うの^{くさむら}叢を一心に見て。自

分は娘の見ているところ、その叢を見ると、草がざわざわと波立ツて、大きな青大将が
のそのそと這^はツて往ツた、しばらくして娘はほ^つツと溜息を吐いて、ああ怖かつた、とに
ツこりしてそしてあたりを見廻わして、またおやと言ツた。先の驚きがまだ貌から消え
ぬうちに、新しい驚きはその心を騒がしたので、以心伝心娘の驚きがすぐ自分の胸にも
移ツた。見ればあたりに誰もいない。母を呼びまた姉を呼んで見たが、答うる者は

こだま
木 精 の響き、梢の鳥、ただ寂然^{しん}として音もしない。

「どこへ皆さんは往きましたろう」心配そうな声で、「ついうツかりしていて」

「そうですねエ……」

「立ツていても仕方がありませんから、まア向うの方を尋ねて見ましょう」

蕨はもうそツちのけ、自分は娘の先へ立ツて駆けながら、幾たびも人を呼んで見たが、
何の答えもなかつた。

「こちらの方ではなかつたかしらん」娘は少し考えていて、「あツちかも知れませんが、
秀さん、あツちへ往ツて見ましょう」

か
走け出して見た、が見当らぬ、向うかも知れぬ、とまたその方へ走け出して見たが見
当らぬ、困ツた。娘はさも心配そうにしきりと何か考えていたが、心細そうな小さな声
で、

「秀さん、あなた、道を知ツていますか？」

自分とてこのへんはめツたに来たことのないところ、道を知ろうはずはない、が方角
だけはようようと考えついた。

「いいえ、よくは知らない、けれどこツちの方が境だから、右の方へずんずん行きやア、
あの、きツと境へ出るから、そうすりやア、もうわけはない。もしか見つからなきやア、
なんの、先へ帰ツてしましましょう」

娘はしばらく考えていたが、少しは安心した様子であツた。

「もし先へ帰ツたら、きツと皆さんが心配しましよう。それにせつかく一しよに参ツた
ものを」……少し考えていたが、「まアこツちの方へ往ツて見ましょう、もう一度、今

度はどこまでも往ツて見ましょう。よう、何をぼんやりして……秀さん」

また歩き出した。

少年のころは人里離れた森へなど往くのは、とかく^{すご}凄^いように思うものだが、まして不知案内の森の中で、しかも大勢で騒いでいた後、急に一人か二人になツて、道に迷いでもすると、何となく心細くなるもので。自分も今日のようなことにもし平常の日に^{たす}出遇ツたならば、定めて心細く思ツたのであろう、がしかし愛というものは奇異なもので、（たといこの時自分は娘を慕ツていたと知ツていなかツたにしろ）隠然と愛が存していたので心細いとは思わなかつた、むしろこの娘とたツた二人、人里を立ち離れた深林の中に手を携えていると思うと、何となく嬉しい心持がして、むしろ連れの者に見つからなければいいというような、不思議な心持がどこにかあツて、そして二人して^{たす}扶^けあツて、木の根を踏みこえて走けて往くのを、実に嬉しいと思ツていた、自分は二町ほどというものは、何の余念もなくただうかうかと、ほとんど夢中で走ツて往ツた。すると突然目の前に大きな湖水が現われた。

はるかに向うを見渡すと、森や林が幾里ともなく続いているが、霞に^{こも}籠^つて限りもなく遠そうだが、近いところの木は梢を水鏡に写して、^{さかさ}倒^にに水底から生えているが、その水の青さ、いかにも深そうだが、^{まき}薪^を積み上げた船や^{いかだ}筏^がが湖上をあちこちと往来しているが、いかさま林から切り出したのを、諸方に運送するものらしい。日はもう七ツ下り、斜めに水を照らし森を照らして、まことにいい景色である、がもう見る気はない、娘が^{かお}貌^にに失望の意を現わして、物をも言わず、^{しょうぜん}悄^然として景色を眺めつめているのを見ては。

「おや、こんな大きな沼があるようでは……こちらでもなかつたと見えますねエ、しかたがない、後へ^{もど}戻^りましょう」

娘は^{たんそく}歎息したがどうも仕方がない、再び^{きびすめぐ}踵を廻らして、林の中へはいり、

およそ二町余も往つたらうか、向うに小さな道があつて、その突当りに小さな^{くさのや}白屋があつた。娘はこの家を見ると、少し歩くのを遅くして、考えている様子であつたが、
「秀さん、ちょうどいい。あすこの家へ往つて頼んで、皆さんを尋ねてもらいましょう。

それに皆さんも私たちを尋ねて、ひよつと^{あすこ}彼家へでも尋ねて往つて、もし私たちが来たら止めておくようにと頼んであるかも知れません、まア^{あすこ}彼家へ往つて見ましょう」

自分は異議なく同意して、いきなりその家へ飛び込んだ。家では老夫婦が糸を取り、
^{わらじ}草鞋を作つていたが、われわれを見てびつくりした様子、自分は老婆に向い、

「おい^{ばあ}婆やア、誰か尋ねて来なかつたかい、おいらたちを」

「はアい、誰もござらつさらねエでしたよ」老婆は不審そうに答えた、「誰か尋ねさつしやるかな、お坊様」

「蕨採りに来たのだが、はぐれてしまつたの、連れの者に。おい、^{じい}老爺や、探して来てくれないか、ちょつと往つて」

自分が^{だしぬけ}唐突に前後不揃いの言葉で頼んだのを、娘が継ぎ足して、始終を話して、
「お気の毒だが見て来て」と丁寧に頼んだ。

「それエ定めし心配していさつしやろう、これエ^{とつさま}爺様よう、ちょつくら往つて見て来て上げさつせいな」

最前から手を休めて、老父は不審そうに見ていたが、
「むむ見て来て上げべい。一ツ走り往つて」

ト言つたが、なかなかおちついたもので、それから^{ゆうぜん}悠然と、ダロク張りの^{きせる}煙管へ

煙草を詰め込み、二三^{ぶく}吹 というものは吸ッては吹き出し、吸ッては吹き出し、それからそろそろ立ち上ッて、どツかと上り鼻へ腰を掛けて、ゆヅくりと草鞋をはき出した。はいてしまうと、丁寧に尻を端折ッて、さてそこでヤッと自分に向ッて、
「坊様、どツちらの方でさアはぐれさしッただアの？」

自分は方角を指し示した。老婆は^{じい}老爺の出で往くのを見送り、それから^{はなごさ}花筵を引き出して来て、
「さア嬢様。お掛けなせいまし、そこはえらく汚ねエだから。さお坊様掛けさッさろ」
「婆やア湯をおくれ、気の毒だが」

「湯かのう？ 今上げますで、少し待たッせい、一ツくべ^ふ吹ッたけるから。」

老婆が^{かんす}罐子の下を吹ッたける間、自分は家の内を見廻した。この家は^{すす}煤だらけにくすぶり返ッて、見る影もないアバラス堂で、^{よみほん}稗史などによく出ている山中の一軒家という書割であツた。そのうちに罐子の湯は沸き返ッたが、老婆は、ヒビだらけな汚ない茶碗へ湯を^く汲んで、それを縁の欠けた丸盆へ載せて出した。自分は喉が^{かわ}渴いていたから、^{うつわ}器のきたないのも何も知らず、ぐツと一息に飲み、なお三四杯たてつけに飲んだ、娘は口の傍へ持ッて往ッて見て少し^{ためら}躊躇ッていたが、それでも半ば飲み干した、この時自分は、「さても罐子の湯はうまいものだ」と思ッた。

この老婆は誠に人のよさそうな老婆で、いろいろなことを話しかけるので、娘はその相手をしていた。自分はまたかかる山家へ娘と二人で来て、世話になるというのは、よほど不思議なこと、何かの縁であろうと思ッた、それが考えの^{いとぐち}緒で、いろいろのことを思い出した。すなわち、このような山中で、竹の柱に^{かや}萱の屋根という、こんな家でもいいによッて、娘と二人していたいと思ッた、するとその連感で、自分は娘と二

人でこの家の隣家に住んでいる者で、今ちよツと遊びにでも来た者のような気がした、

するとまた娘の姿が自分の目には、^{あら ざら はりめぎぬ} 洗い晒しの針目衣を着て、^{あかねもめん} 茜木綿の

^{たすき} 襷を掛けて、^{きぬ} 糸を採ツたり衣を織ツたり、^{すす} 濯ぎ洗濯、^{しず} きぬた打ち、賤の

^{てわざ} 手業に暇のない、画にあるような山家の娘に見え出した、いや何となくそのように思われたので。それゆえ自分は連れにはぐれて、今ここへ来ている者だなどということは、ほとんど忘れたようになツていた。不意に表の方が騒がしくなツた。

自分は覚えぬ貌を上げてそして姉を見た。

「おお秀坊が！」

第一に姉が叫んだ。

誰しも苦痛心配は^{きら} 厭いであるが楽になツてから後、過ぎ去ツた苦痛を顧みて心に思ひ出したほど、また楽しみのことはない、それと大小の差はあるが、心持は一ツだ。昼間自分たちのはぐれたのは、一時は一同の苦痛であツたが、その夜家へ帰ツてから、何かにつけてそのことを言い出しては、それが笑いの種となり話の種となツた時には、かえツて一同の楽しみとなツた。自分は娘が嬉しそうな貌をして、この話をしている様子を見て、何となく喜ばしく、そして娘も苦痛を分けた人が自分であると思うと、一層喜ばしく、その日の蕨採りは自分が十四歳になるまでに絶えて覚えぬほどな楽しみであ

ツた、と思ツた。しかし悲喜哀歓は^{よろこび} 實にこの手の裏表も同じこと、^{こよい} 歡喜の後には必ず悲しみが控えているが世の中の習わし。平常は自分はいつも稽古に往ツていて、夜で

なくては家にはいない、それゆえ何事も知らずにいたが、^{こよい} 今宵始めて聞いた、娘は今

度逗留中かねて世話をする人があツて、そのころわが郷里に滞在していた^{こが} 当国古河の城

^{おおいのかみ} 主土井大炊頭 ^{なにがし} の藩士 某 と、年ごろといい、家柄といい、ちょうど似つこら

しい夫婦ゆえ、互いに滞留しているこそ幸い、見合いをしてはと申し込まれたので、も

とより嫁入り前の娘のことゆえ、叔父もたちまち承諾して見合いをさせたところ、当人同志の意にもかない、ことに婿になる人が大層叔父の気になつたとやらで、江戸へ帰つたらば、さらに仕度をさせて、娘を嫁入らせるということを知った。

これを聞いた自分の驚きはどんなであつたらう、五分も経たぬうち、自分はもうわが部屋で貌を両手へ埋めて、意気地もなく泣いていた。

その夜寝てから奇妙な夢を見た、と見れば、自分は娘と二人でどこかの山路を、道を失つて、迷つている。すると突然傍の熊篋の中から、立派な武士が現われて、物をも言わず、娘を引つさらつて往こうとした。娘は叫ぶ、自分は夢中、刀へ手を掛ける、夢中で男へ切りつける、肩口へ極深に、彼奴倒れながら抜打ちに胴を……自分は四五寸切り込まれる、ぼつたり倒れる、息は絶える、娘はべつたりそこへ坐つて、自分の領をかかえ抱き起して一声自分の名を呼ぶ、はつと気がついて目を覚ます……覚めて見ると南柯の夢……そつと目を開いて室を見廻わして、夢だなと確信はしたが、しかしその愛らしい優しい手が自分の領を抱えて、自身が血に汚れるのも厭わず、血みどりの体を抱き起して、蕾のような口元を耳の傍へ付けて、自分の名を呼んだ時の貌、その貌はありありと目に見える、それに領は、どうしても、たつた今まで抱えられていたような気がする、そつと領へ手をやつて見ると、温かい、静々室の内を見廻わして見たが、どうも娘がいたようで、移り香がしているような気がする、さアそう思うと、気が休まらぬ。床の上へ起き直つて耳を清して見ると、家内は寂然としていて、鼠の音が聞えるばかり……自分はしばらく身動かしもせず、黙然としていたが、

ふと^{よい}甲夜に聞いたことを思い出して、また何となく悲しくなッて来た。

さて翌日となッた、明日の晩は叔父も娘も船路で江戸へ帰るから、今宵一夜が名残りであると、わずか十里か十五里の江戸へ往くのを天の一方へでも別れるように思ッて、名残りを惜しむ一同が夜とともに今宵を話し明かそうと、客座敷へ寄り集まッた。自分は悲しさやる方なく、席へ連なるのも気が進まぬゆえ、心持がわるいと名を付けて、孤燈の下にわが影を友として、一人室の中ですねていた、が暫時はこうしていたようなもののそのうちに、娘はどうしたか、という考えが心の中でむずついた。もう棄ててはおかれぬ、そッと隣座敷まで往ッてはいろいろか、はいるまいか、と^{ためら}躊躇いながら客座敷の様子を伺うと、娘は面白そうにしきりに何か話していた。自分のことなどは夢にも思ッていないようで。こう思うと気がもしやくしやくとして来た、すぐに^{きびす}踵を廻らして室へ戻り、机の上へ突ッ伏してただわけもなく泣いていた。しばらく経つと、唐紙の開くような音がして、誰だか室へはいッて来た、見れば姉で、^{ばば}祖母さまがあちらへ来いと言うからおいで、と言ッていろいろ勧めた、自分の本心は往きたかッたので渡りに舟という姉の言葉、すぐ往けばよかつたが、そこがわがままッ子の癖で、——お泣きでないよ、と優しく言われると、いよいよ泣き出したがるようなもので——勧められるほどいよいよすねて、

「厭だと言ッたら厭だい。馬鹿め」

姉はあきれて往ッてしまッた、もう往く機会は絶えた、一層わが身を悔んでわれとわが身に怒ッていると、次の間へ人の足音がして隔ての^{ふすま}襖が開いた。姉だと思ッてふり向きもせず、知らぬ貌をしていると、近づいた人は叱るような調子で、

「何をしておいでなさるの」と言ッて自分の手を押さえて、「そんな^{わるいたずら}悪戯をするものではありませんよ」

自分はこの時^{かんしゃく}癪癪を起して、小刀で机を削ッていたので……また削ろうとした。

「よすものですよ」と言ッて自分の泣き貌を見て、「おや、どうなすツたの。何を泣いていなさるの。え。え」

自分はこれを聞くと、わけも道理もなく悲しくなッて来て、たださめざめと泣き出した、すると娘は自分の肩へ手を掛けて、机に身を寄せかけて、清^{すす}しい目を充^{いッ}分に開いて、横から自分の貌を覗^{のぞ}き込んで、

「なぜお泣きなさるの、何か悲しいことがあるの。え。お^{なか}腹でも痛い。え。え。気分でもわるいの」

自分は首^{かぶり}をふツた。

「そうではないの。それではどうしなすツたの、泣くものではありませんよ。よ。よ」

自分は袖^{そで}でいきなり泣き貌をこすツて、

「お姉さま……あなたは……あの^{あした}明日もう帰るんですか……どうしても」

娘はしけしけと自分の貌を見ていたが、物^{もの}和^{やわ}らかに、

「秀さん、それであなた泣いていたの」

首をかしげて問^{たず}ねたが、自分が黙ッていたのを見て、自分の頭^{かしら}を撫でようとした、自分はその手をふり払い、何か言ッてやろうと思ッたが、思想がまとまらなかつた。

「お姉さま、あなたは……、あの、あの悲しくも何ともないの……^{みんな}皆に別れるのが」

娘は眉^{ひそ}を顰めて、不審そうに自分の貌を見ていたが、

「おやなぜ？ 悲しくないことはありませんが、もう父^{おとッさん}上も帰らなければなりませんし……それにいろいろ……」言おうとして止め、少し考えていて、

「秀さん、私ももう今夜ぎりで帰るのですから、仲よく遊びましょう。ね。さア。もう泣くものではありません、さア泣き止^やんで」

ああ何として泣かれよう、自分の耳には娘のいう一言一言が、小^{おぐさ}草の上を柔らかに撫でて往く春風のごとく、聞ゆるものを、その優しい姿が前に坐^まつて、その美しい目が自分を見て、そして自分を慰めているものを、ああ何として泣かれよう。五分も過^たたぬ内、自分はもう客座敷で、姉や娘と一しょになつて笑い興じて遊んでいた。

翌日の晩方自分は父ともろともに、叔父と娘とを舟へ乗り込むまで見送つたが、別^{きわ}の際に娘は自分に細^{こまごま}々と告^{いとまごい}別をして再会を約した。自分は父と並んで岸辺に立^たつて、二人が船へ乗り込むのを見ていたが、その時の心持はどんなであつたらう、親兄弟にでも別れるように思^{おも}つた、そしてその別れる人の心は^{なんびと}何人のことを思^{おも}つて

いるのかと思うと、なお悲しさも深かつた。娘が^{さんばし}棧橋を渡^{わた}つて、いよいよ船へ乗り込もうとして、こちらをふり向いて、

「叔父様、御機嫌よろしゅう。さようなら秀さん」

ト言^いつた声、名残りに残したその声はまだ四方に消えぬ内、姿は船の中へ隠れてしまつた。

無情の船頭、船のもやいを解^きいて棹^{さお}を岸の石に突き立てる、船は岸を離れる、もうこれが別れ。父も悄然として次第に遠くなる船を見つめている様子……すると船の窓から貌を出した、誰であろうか、こちらを眺めている、娘ではないか。情を知らぬ夕霧め、^{かわつら}川面一面に立て込めてその人の姿をよく見せない、あれが貌かというほどに、ただ

ぼんやりと白いものが、ほんのかすかに見えるばかり。ああそれさえ^{またた}瞬^まきをする間、

娘の姿も、娘の影も、それを乗せて往く大きな船も^{ろびょうし}櫓拍子のするたびに^{さぎり}狭霧の中

おお
に蔽われてしまう、ああ船は遠ざかるか、櫓の音ももう消え消え、もう影も形も……

とねがわ
櫓の音も聞えない、目に入るものは利根川の水がただ洋々と流れるばかり……

* * *

こが
娘は江戸へ帰ッてから、ほどなく古河へ嫁入りしたが、間もなく身重になり、その翌

むしけ
年の秋虫気づいて、玉のような男子を産み落したが、無残や、産後の日だちが悪く、
十九歳を一期として、自分に向ッて別れる時に再会を約したその言葉を、意味もないも

たぐい
のにしてしまッた。しかしかつて娘が折ッてくれた鶴、香箱、三方の類はいまだに

かたみ
遺身として秘蔵している。

かおかたち すず
ああ皆さん、自分は老年の今日までもその美しい容貌、その優美な清しい目、

つや びんずら
その光沢のある緑の鬢、なかんずくおとなしやかな、奥ゆかしい、そのたおやかな花の姿を、ありありと心に覚えている……が……悲しいかな、その月と眺められ、花

こけむ
も及ばずと眺められた、その人は今いずこにあるか。そのなつかしい名を刻んだ苔蒸

せきばく ねぶ
す石は依然として、寂寞たるところに立ッているが、その下に眠るかの人の声は、

おきな
またこの世では聞かれない、しかしかくいう白頭の翁が同じく石の下に眠るのも、

もみじ ちようろ
ああもう聞のないことであろう。まことに人間の一生は春の花、秋の楓葉、朝露、

せきでん
夕電、古人すでにいつたが、今になッてますますさとり。初めて人をなつかしいと

思ツた、その^{つぼみ}蕾のころはもちろん、ようよう成人して、男になツて、初めて世の中へ出た時分は、さてさて無心なもの気楽なもの、見るもの聞く物皆頼もしい、腕はうな

る、肉はふるえる、英気^{ぼつぼつ}勃々としてわれながら禁ずることが出来ない、どこへどうこの気力を試そうか、どうして勇気を漏らそうかと、腕をさすツて、放歌する、高吟する、眼中に恐ろしいものもない、出来なさそうな物もない、何か事あれかし、腕を見せようと、若い時が千万年も続くように思ツて、これもする、あれもしたいと、行末の注文が山のようにあツたが、ああその若い時というは、実に、夏の夜の夢も同然。光陰矢

のごとく空しく過ぎ、秋風^{せきせき}淅々として落葉の時節となり、半死の老翁となツた今日、

はるかに昔日を思い^{いだ}出せば、恥ずべきこと、悲しむべきこと、ほとんど数うるに

いとま^{いとま}暇がない。ああ少年の時に期望したことの中で、まア何を一ツしでかしたか、少壮のころにさえ何一ツ成し遂げなかつた者が、今老いの坂に杖突く身となツて、はたして

何事が出来ようぞ、もはや^{だめ}無益だ。もはや^{つや}光沢も消え、色も衰え、ただ風を待つ^{しお}凋れた花、その風が吹く時は……

底本：「日本の文学 77 名作集（一）」中央公論社

1970（昭和 45）年 7 月 5 日初版発行

初出：「都の花」

1889（明治 22）年 1 月

※白抜きの読点をコンマ「，」で代用しました。

入力：土屋隆

校正：小林繁雄

2006 年 6 月 27 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）](http://www.aozora.gr.jp/)で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。